

野岸っ子見守り隊

小山 宥一さん(右)
中村 清繁さん(左)

小諸市には、子どもたちの登下校の安全を見守る「見守り隊」と呼ばれる人たちがいる。

皆さんが自主的に取り組み、ボランティアで行っている。



「一緒に歩くと、会話ができて楽しい。」と話す、野岸小学校の児童の安全を見守る小山さん。小山さんは、地域で学校を支えるコミュニティスクールの立ち上げにも関わり、その中の一つの『野岸っ子見守り隊』の活動に参加し、今年5年目を迎えた。見守り活動は、今や小諸市の至る所で目にする。

現在、野岸っ子見守り隊で活動されている人数は20名ほどで、交通安全の観点から、危険性の高い交差点で見守り活動をしたり、交通安全と防犯の観点から登下校に同行している方たちがいる。

小山さんと中村さんは、放課後、低学年の児童たちと一緒に、野岸小学校から「こもロッジ」まで歩いていく。

子どもは何をするか読めない。「ある時、子ども同士がふざけっこして、急に走り出して横断歩道に飛び出した。自動車が近くまで来ていて、ヒヤッとしました。」ことがあり、見守り活動にも難しい面があるという。

見守り隊の活動は様々。子どもたちが通学路の横にある倉庫の軒に大きなスズメバチの巣を見つけた。小山さんは危険だと感じて学校に連絡し、学

校でも駆除してもらったことのある業者を紹介され、すぐに業者と倉庫の家の家主に連絡して来てもらい、その日のうちに駆除できた。

「通学路で危険箇所があればすぐ学校の先生に報告でき、子どもの安全を確保できる。子どもたちの身近に居るため、人間関係等でトラブルがあれば念のため先生に報告しています。」

小山さんたちが見守り活動を続ける意味は、子どもたちの成長の姿が見られることと、自分の健康のためでもあるという。

「見守り隊の活動をする子どもたちとの関わりは多く、一日一日の成長が良く分かる。以前に転んで怪我した女の子をおんぶしてあげたことがあったが、子どもといえど重く、『もう痛くない？歩ける？』と聞くと、『まだダメ』と言われ、こもロッジまで行ってしまった。」と笑いながら小山さんは話す。

取材で見守り隊の活動に同行した日、子どもたちは楽しそうに一日に起きた出来事を見守り隊に話していた。見守る側と見守られる側の信頼は厚く、見守り隊と代わるがわるの手をつなぐ子どもたちの姿があった。



①子どもセンターまでの道のりの安全を確保しつつ、子どもたちの問いかけに丁寧に答える。②道中にハチの巣を見つけた子どもが見守り隊に報告。子どもと一緒に現場を見て、危険性の有無を判断している。③見守り隊と一緒に子どもセンターに着いた子どもたちは、受付を済ませたら宿題をやったり、友達と遊んだり元気いっぱい。

